



父母から学ぶ

学校長 小邑 政明

私の母によりますと、父との結婚は恋愛結婚だったそうです。戦後間もない頃、飛騨市(当時は古川町)に数名の有志による楽団が結成され、テレビもない中町の人々にとって貴重な娯楽となっていたそうです。ドレスを着てマイクの前で歌う母と、傍でギターを弾く父の姿を撮った写真が残っており、まんざら嘘でもないようです。劇団での縁で父と母は結婚し、私が生まれました。

そんな経歴もあって、父も母も「勉強」に価値観をもっておらず、私も弟や妹も親から「勉強しろ」と言われたことは一度もありませんでしたので、小学生までは野球や水泳漬けの楽しい毎日を送っておりました。中学生になると、高校へ行きたいという気持ちが湧いてきました。当時は高校へ進学する子が就職する子を少し上回る程度でしたので、中学生になると二者択一の大きな決断を迫られることになりました。個人塾に行き着いて友人もいたので、私も通いたいと父母に相談すると、「お金がもったいないからお前は自分で勉強して力を付けよ。弟や妹が中学生になったらお前が家庭教師をしろ。小遣いはやる。」という答えが返ってきました。

このことがあって、今では、「勉強は自分でやるもの、自分の頭で納得のいくまでとことん考えることが大切。」が私の学問に対する基本姿勢になっています。

私の家は、田を耕す機械をメーカーから購入して農家に販売するという仲卸業をやっていました。父は、昼間は機械の修理などを行い、販売契約は夜に農家を訪れて行っていました。なぜか小学生だった私も一緒につれて行きました。昼間の遊びの疲れが出て眠たそうに眼をこする子どもの姿で話のきっかけづくりをしようという意図があったかもしれ

ませんが、機械を使って田を耕すことのメリットを具体的に説明する父の真剣な姿が今でも脳裏に残っています。契約が成立した帰りにはお菓子を買ってもらえました。私も貢献できた嬉しき気持ちになりました。この商談の進め方の中で私が父から学んだことは、交渉ごとは「まず相手の話をじっくり聞き十分理解した上で、相手の気持ちに寄り添う形でこちらの思いを提示する」ことが大切だということです。



(高3)

こんな生い立ちをもつ私ですが、高校の先生の影響から、自分の生涯の仕事として「数学の先生」を選ぶこととなり、大学を受験することとなりました。ところが、高校3年生の冬に私の家の傍を流れる川の護岸工事が始まりました。大きな音に悩まされる私の姿を見かねた母が町役場に抗議に行ってくれました。「私の息子の将来がかかっているので工事を中止してほしい。」との要望に、町の担当者は「お気持ちはよく分かりますが、川の氾濫対策は町の将来がかかっていますので辛抱してください。」と回答したそうです。母は役場の帰りに耳栓を買ってきてくれました。私が大学受験をした頃は、センター試験がなく二次試験のみで二日半の日程で行われました。受験会場に着くと少し離れた場所で新しい校舎を建設中でした。大きな騒音ではなかったのですが静かな受験会場では気になりました。集中できなかった受験生もいたようですが、私には「母の応援歌」に聞こえました。「精一杯のことをすれば天は味方する」母から学んだ金言です。

今回は「知識社会を生き抜け(武田信玄「甲陽軍鑑」に学ぶ)」について書きます。